

いわさきちひろの絵と心

眞鍋彩紀 2010/6/10(木)

はじめに

いわさきちひろってどんな人だったの？

「ひとことでいえば、彼女の絵のような人です」

(いわさきちひろの元夫・松本善明)



一、「童画家」いわさきちひろ以前

1. しあわせな少女時代

ゆきのひのたんじょうび

* 1918年、福井県武生市(現・越後市)に生まれる。

母・文江・・・高等女学校教諭、父・正勝・・・陸軍築城本部の技師

妹・世史子、準子

* 恵まれた家庭に育つ・・・ラジオ、蓄音機、オルガン、カメラ、クリスマスのお祝い

「だって、第六高女だもの」

* 1931年(12歳) 東京府立第六高等女学校入学。18歳まで在学。

* 創立者・丸山丈作

「聡明で健康で、自分に自信があって、判断力と行動力に富んだ女性を育てる」

* 「ユニーク」な校風・・・期末試験なし。室内プール、ミシン(アメリカ製、ドイツ製)、洗濯機、ピアノは世界最高級のスタンウェイ。ジャンパースカートの制服。ショートカット。

* 体育を重視。ちひろもスポーツ万能。スキー、スケート、水泳、登山。

絵はおけいごと

* 岡田三郎助画伯に師事

「絵本の好きだった子は、毎日絵を描いて遊んでいた。小学校は絵の上手な子で通った。女学校に入っても絵が上手いとみんなにいわれた。女学校二年生の三学期、やっと母親は自分の子に絵の才能をみとめたか、岡田三郎助画伯の門をたたいてくれた。」

* 1936年。女流画家グループ展覧会「朱葉会」で入賞。

2. 最初の結婚

良妻賢母

* 第六高女補習科卒業(1936年)

「可愛い純な岩崎さん、良い奥様におなり下さい」「貴女はきつとおとなしい良妻賢母よ、おしとやかに幸福に」「御結婚なさったら、それこそお母様の御教へを守り遊ばして良い御子様をどうぞ・・・」

「チーちゃん、いつまでも可愛く、おとなしくね。そして将来、画家の大家になったら私にもきつと一枚頂戴ね」(卒業アルバムの学友からの告別の言葉より)

結婚は両親の命ずるままに

* 1939年4月29日、結婚。20歳。

相手の青年は東洋拓殖株式会社社員。絵を習いにくちひろを見初め、見合い。
「外国で暮らせるなら」・・・

「東洋のヨーロッパ」中国・大連での暗い新婚生活

* 「ちひろじゃない」時代。「知弘」から「靖子」へ

絵すら描かない日々。三尺帯を締めた少女のような格好で夫を待つ「かわいい奥さん」。

しかし、実際は・・・夫婦別室、夫婦関係の拒絶

* 夫の自殺。1940年、自宅で縊死。

時代の生んだ悲劇

* 当時の結婚観・・・両親が適当な「婿」(ないしは「嫁」)を子のために探す。結婚さえすれば、若い二人はひとりでの「恋愛」にいたるもの。ちひろの両親はその典型。

* 二十歳にもなれば、親たちは結婚をい急いだ。「生めよ増やせよ」が国策であり、教師として「軍国の花嫁」「軍国の母」を育てる立場であった母・文江は、当然、娘・ちひろにもそれを求めた。

* 「愛なんか全然なかった。私は『失敗したから』って・・・」(妹・準子)

* 「この第一次結婚は、時代の大きな犠牲であると考え。あの戦争というものが、人間の生活をいかに不幸にするものなのかという、たいへん強力な証拠だと思うのである」(ちひろ美術館初代館長・飯沢匡)

* 「結婚は早すぎてもいけない。おそすぎてもいけない。無理が一番いけない。自然がいい。恋はながくはつづかない。それは人生にはもっと大事な務があるからだ」(1945年8月17日 ちひろの日記・武者小路実篤『幸福者』の抜書き)

3. 戦争の中の繁栄

岩崎家と戦争

* 母・文江：ちひろも通った東京府立第六高等女学校の教員。1940年からは、大日本青年団主事となり、満州に「大陸の花嫁」を送り出す仕事に関わる。

戦争の進行と共に、社会的地位が向上。全国規模の大日本女子青年団主事となり、青年団指導者を引率して一ヶ月の満州開拓団の視察を一ヶ月行うなど、当時の教育者としては、最高とも言える地位にのぼりつめている。

* 父・正勝も、陸軍の一員として、当然この義務を忠実に遂行していく。

* 1941年、日本が戦争を拡大していくこの時期が、岩崎家がもっとも華やいだ時代。

「お花畑に蝶々が舞っているような家」

敗戦の一年前、満州へ

* 1944年5月、ちひろ、妹・世史子、友人・伊藤敏子、青年画家・中谷泰と大陸へ。

約20名の「大陸の花嫁」も一緒。

* 行き先は中国東北部・満州の勃利。ソビエト国境に近く、日本の重要な軍事拠点。

渡満の名目は、女子儀勇隊訓練所で、習字を教える教師として就職することだった

が…

* 東京で書を教えていた少女の紹介状があったおかげで、叔父・現地部隊長・森岡正大佐に引き取られる。

陸軍病院での「楽しい生活」…トラックいっぱいの花、すしや洋食

* 1944年夏、戦局の悪化。大佐の尽力により、8月に帰国。

* 大佐は後にフィリピンで戦病死。女子儀勇隊訓練所の女性の中には、生きて日本に帰れなかった者、生き残っても中国残留孤児として苦難の人生を歩んだ人も大勢いた。

* 「釜山から帰ってきたんですが、混んでいて大変でした。私たちは軍属で特別に切符を手配してもらったらしいです。普通は帰れないです。とくに私たちは軍属で行ったんですから、半年で帰れたなんて…(開拓団の女性は)すごいです。全部死んでいます。友だちもいましたけど…」(妹・世史子)

* 「偶然 - ほんの一枚の気軽な紹介状が、小娘3人の命を救ったのである。後の、非常に政治的立場を明らかにしたちひろの後半生を考えると、私はこの大名旅行が反射的に浮かび上がってくるのである。

そのときは、後に歴史の大悲劇になることなど、つゆほども思い至らなかったちひろは、長じて世界の歴史を読み直し、必ずや、日本のマイナスの歴史の中に自分もかつていたことに思い至ったに違いないのである」(飯沢匡)

二. 自立、新たな出会いの中で

1. 終戦 - 日本共産党との出会い

松本で迎えた終戦

* 1945年5月25日の空襲。岩崎家のあった中野、杉並、新宿など山の手方面に470機のB29が来襲。22万戸が被災し、7514人の死者を出した。初めての戦争の恐怖。

* 焼け出された岩崎家は、母の実家・長野県松本へ。

* 1945年8月15日。終戦。

* 1945年8月16日の日記

「国破れて山河有。

敗戦の日、胸が一杯になつて、ただむしやくしや日本のやり方が悲しかったけれど、今日はそのほとばしるやうな激した感情が潮を引いたやうに静まり、たまらなくやせなく寂しい気持ちで一杯になつた。

武装解除の日本かー

まだまだ戦をつづける余力ありと信じきっていた私は、ガーンと脳天を殴りつけられ、昏倒したあと徐々に朦朧とした意識を回復しつつ、そのくやしさを思ひ出し始めたやうな青い切なさや怒りを覚える。

日本の飛行機は全部とべ(搭乗している飛行兵たちは泣いているかもしれない。最後の軍服をきて)私はそれにかんれんして深く深く思い胸を痛めることがある。しかしこの手帳に書くにはしのびない。」

日本共産党との出会い

* 1946年1月、日本共産党の演説会に参加。間もなく入党を決意。

「戦争が終わって、はじめてなぜ戦争がおきるのかということについて学びました。そして、その戦争に反対して牢に入れられた人たちのことを知りました。殺された人のいることも知りました。大きい感動を受けました。その方々の人間に対する深い愛と、心理を求める心が、命を懸けてまでこの戦争に反対させたのだと思いました」

* 両親との確執。1946年4月東京へ…

2. 東京へ - 松本善明との出会い

画家として、自立の一步

* 『人民新聞』記者募集を頼りに上京。挿絵も描く記者として採用される。労働者や、子どもを描く。

松本善明との出会い

* 松本善明…当時日本共産党議員団の秘書。後に国会議員となる。

* 1949年8月。松本善明と会議で初対面。

ちひろ30歳。善明23歳。

* 最初はサンドウィッチ目当てだったが…

* 1949年11月

善明 「私のことをどう思っているのですか」

ちひろ 「とにかく今日はお帰りください」

二度目の結婚の決意

* 1949年11月7日 革命記念日

「この間のこといいです。よろしく」

* 花の結婚式

* 結婚の誓い

一、人類の進歩のために最後まで固く結び合って闘うこと

一、健康的な生活をする事

一、お互いの立場を尊重し、特に芸術家としての妻の立場を尊重すること

一、建設的な財政を実行すること

一、土曜日に以上の事を点検すること

* 息子・猛

三. 子どものしあわせを描き続けて

1. ちひろの子ども観

かわいい子どもしか描けない

* 「あまったるい」「リアルな子どもが描けていない」という批判

*「働いている人たちに共感してもらえ絵を描きたいと、ねがいつづけてきた私は、自分の絵に、もっと『ドロ臭さ』がなければいけないのではないかとずいぶんやんできたものでした。ドロコになって遊んでる子どもの姿が描けなければ、ほんとうにリアルな絵ではないかもしれない。その点。私の描く子どもは、いつも夢のようなあまさが、ただようです。実際、私には、どんなにどろだらけの子どもでも、ボロをまとっている子どもでも、夢をもった美しい子どもに見えてしまうのです」

妻として、母として、画家として

* 国会議員の夫、わんぱくな生意気な息子、
夫と自分の母親、すみこみのお手伝いさんとその子ども

*「私なんか、独身だったら気楽で、絵もバンバン描けるだろうと考えられているけど、とんでもないですよ。夫がいて子どもがいて、私と主人の両方の母がいて、ごちゃごちゃのなかで私が胃の具合が悪くなって仕事していても、人間感覚のバランスがとれているんです。そのなかで絵が生まれる。大事な人間関係を切っていくなかでは、特に子どもの絵は描けないんじゃないかと思います」

2. 世界中の子どもみんなに平和としあわせを

*『わたしがちいさかったときに』(1967年)・・・広島で被爆した子どもの作文に絵をつけた

*『母さんはおるす』(1972年)・・・ベトナム戦争中。戦いに赴いたお母さんを待つ兄弟

* 傷ついた子どもは描けない

「平和で、豊かで、美しく、可愛いものが本当に好きで、そういうものを壊していこうとする力に限りない憤りを感じます」

3. 『戦火の中の子どもたち』(1972年)

まだ終わらないベトナム戦争

*『母さんはおるす』のなかでちひろは、子ども達を精一杯かわいく、生き生きと描いた、たしかに、この小説に描かれたようにたくましく生きる子どもたちがベトナムにはたくさんいたのだろう、しかし、一方で、現実には、母親を殺され、兄弟を殺された子どもたちも無数に存在していた。その子どもたちの悲しみを、ちひろは描かなければいけないと考えたのだろう。『母さんはおるす』だけでは描ききれなかったものを『戦火のなかの子どもたち』で表現したのだ。(ちひろの息子・猛)

大人としての責任・・・怒る母親を描く

*「いま、アメリカがベトナムに爆弾の雨を降らせていますけれど・・・人ごとではないのです。この非人間的なことをやっているアメリカに何も感じないとしたら、それはそういうことになるでしょう。

やさしい心の人たちはみんな怒っています。その爆撃をやめさせようと、何らかの形でベトナムに手をさしのべています。

愛情と怒りはまさに表裏一体なのです」

*「戦火で焼かれたって、子どもはお母さんの腕にさえいればもう安心だ。お母さんの声さえ聞けばもう安心だという気持ち」

四. ちひろの最後

1971年肝臓がんに。本人は十二指腸潰瘍だと説明されていた。

夫との別れ

*「元気になったら無欲の絵を描きたい」

* 1974年8月8日朝

「いいか」「いいわ、革命家の妻ですもの」

さいごに

ちひろ最晩年の手帳より(1973年)

私力がなくて無力なとき(いつもそうなのだろうけど)、人の心のあたたかさに、本当に涙ぐみたくなる。

この全く勇ましくも雄々しくもない私のもって生まれた仕事は絵を描くことなのだ。たくましい、人をふるいたたせるような油絵ではなくて、ささやかな絵本の絵描きなのである。そのやさしい絵本を見た子どもが、大きくなってもわすれずに心のどこかにとどめておいてくれて、何か人生のかなしいときや、絶望的になったときに、その絵本のやさしい世界をちょっとでも思いだして心をなごませてくれたらと思う。

それが私のいろんな方々へのお礼であり、生きがいだと思っている。

いわさきちひろに会いたくなったら・・・

* 東京ちひろ美術館・・・ちひろの自宅跡地に

* 安曇野ちひろ美術館・・・ちひろの故郷に